

どんな仕事でも、そしてどんなベテランにも、「初めての経験」があります。その時の気持ち、覚えていますか？ 3面に掲載した特集「初めての〇〇」では、若い組合員から、体験手記を寄せてもらいました。

出版労連

日本出版労働組合連合会

●編集発行人 日本出版労働組合連合会
●〒113-0033 東京都文京区本郷4-37-18
いろは本郷ビル2階
●TEL. 03(3816)2911 ●FAX. 03(3816)2980
●URL http://www.syuppan.net/
●E-mail/rouren@syuppan.net
毎月1日発行
1960年11月10日第三種郵便物認可
定価60円
組合員は会費に含む

4・15 国民春闘など

賃金底上げ求め行動

平川副委員長も発言

全労連と国民春闘共闘委員会は4月15日、春闘勝利を掲げて中央行動を行った。厚生労働省前の行動には約700人が集結。同委員会の小田川義和代表幹事（全労連議長）は、「格差と貧困に立ち向かう運動強化を」と呼び掛けた。

山形県労連は「最低賃金底上げを」として、生計費試算調査の結果を持って経営者団体へ要請に回った。都市部と地方で最低生計費に大きな差がないことへの気持を高めたという。

「いま東北6県の県労連で新たな生計費調査を始めている。共同して全国一律最賃を求めていく」

出版労連では約50組が企業内最賃を締結している。今春闘では

次は1500円

行動では格差是正に向けた取り組みが報告された。



春闘勝利中央行動で発言する平川修一副委員長（4月15日、厚労省前）

1万円賃上げ

図書文化労組

16春闘 継続雇用での成果

2006年4月から継続雇用制度が始まり今年で10年が経過した。その間、継続雇用者は不可欠な人材として正社員と同等の責任ある業務を行ってきた。この現状を見て、継続雇用者にも正社員と同等の待遇が与えられるべきであると考え、組合はこれまで継続雇用者への一時金支給を強く訴え続けてきたが、前進回答は得られなままであった。

この現状を見て、継続雇用者にも正社員と同等の待遇が与えられるべきであると考え、組合はこれまで継続雇用者への一時金支給を強く訴え続けてきたが、前進回答は得られなままであった。

二玄社争議

都労委調査始まる

2015年5月の組合結成以来、「労働組合は認めない」と団交拒否を続ける二玄社経営に対して、組合が東京都労働委員会に不当

会社側は渡邊社長が弁護士1名と出席。都労委は、話し合いに応じるよう説得を試みたようだが、会社は「会社側の人間が入っている労働組合は認めない」と申し立て自体を却下してほしい」と、非難的な対応に終始した様子。第2回調査は5月31日13時30分からは、東京地裁では継続雇用組合員の雇止めをめぐる地位確認裁判が進行中だが、不当な賃金減額に対しては是正を求めて組合員9名が、4月15日、新たに提訴した。引き続き支援のほどお願いします（対策会議）。



不当配転に抗議（4月15日、廣川書店前で埼玉県の倉庫への配転撤回を求めるM1C争議支援総行動の参加者ら。関連記事2面）

合として団交に臨んだ結果だという。保育職場では時給1000円以上を実現でき、次は1500円をめざすと述べた。

（連合通信）

企業内最賃が前進した単組・職場一覧表（3面）

＊連合通信は労働問題専門の通信社で、本紙は同社と契約し記事の配信を受けています。

ついて前進回答が示され、また、継続雇用者の月例賃金についても前進回答が約束され、春闘ではフルタイム勤務の継続雇用者は月額1万円プラスの前進回答が示された。

この回答に対し、組合からは、一時金がでないのは残念だが、この10年間賃金面の前進が無かったことを考えると今回の回答は評価できるのではないか（図書文化労組書記 長・西岡裕彦）

前進回答に達成感

開隆堂・開隆館労組

16春闘では、これまで「継続雇用者に一時金支給はかなわなかった。しかし、人間ドックの補助金の制度に円を支給する」から、

開隆堂では2008年に継続雇用についての協定を労使で締結したが、協議の過程で一時金をかちとることができないままだった。

しかし、締結直後から、対象者だけでなく職場のあらゆる層から、「一時金が支給されないのはおかしい」という声が出される状況となり、毎回の春闘・秋年末闘争時に、教科書共闘の統一要求にある「継続雇用制度の改善」に則して前進回答を求めてきた。

そうしたとりくみの成果として、15春闘では前述の「今回については2万円」に前進。しかし、有額回答ではありつつも、一時金の回答でなかったことが、かえって職場の「一時金化」を求める思いのひろがりに拍車をかけることとなった。

16春闘では「とくに単組としてこだわった項目」に位置づけられた。さらには強く取り組み、前進回答を引き出した。

職場からは、一時金化と増額について「よかった」「ほっとした」という意見が大勢を占め、達成感を味わうことができた。

（開隆堂・開隆館労組書記長・金谷一美）

白表紙

先日、自分の担当した本を読者が手に取る場面に、偶然にも立ち会うことができた▼とてもうれしい瞬間だった。平静を装いつつも、内心の喜び、感動は相当なものだった。できることなら、本の感想なども聞きたかったが、それはまた次の偶然にかけた▼仕事において、始めから最後まで全てに関わり、把握するということはありません。

大きな流れのなかで、自分が関わる部分というものがあつた。自分が担当する部分の前、その先に誰がどう関わり、最終的にどんな人に届いているのかまでを知ることが、実はけっこう難しい気がする▼編集過程に関わる著者やデザイナー、カメラマン等の想いについては理解しながら本作りを進めてきたつもりだが、その先に触れることはあまりなかった▼印刷や製本、配送等まだまだ未知の部分もあるが、最終的な読者の部分を今回にし、何か一本の道が通ったような気がした。それは自分にとってとても幸せな感覚だった。

（I）